

詩という魔法

作家・作詞家

高橋久美子

「日記と詩は何が違うのですか？」と尋ねられることがある。日記にメロディーをつけても歌になるし、日記を詩だと言いつつたとしても怒られることはない。詩と日記の具体的な線引きはないのだ。

中学三年生のとき、変わった国語の先生が転任してきた。授業の頭で毎回詩を作ろうと言いつつ出たのだ。詩人なんて谷川俊太郎くらいしか知らないぞ、一体どうやって書けばいいんだ。私を含め生徒たちはざわついた。先生はそんな空気おこまいなしで黒板に「光」と書くと、コースターほどの小さな半紙を配った。「今日のお題は『光』です。それでは三分間よーい始め」。

中学生の私は、詩の面白さはテストの点と比例しないことだと知った。なぜなら授業を放棄して教室を飛び出すような金髪の男子に限って、素晴らしい詩を書いたからだ。先生が毎回発表する優秀作品の中に、ときどき彼らの詩も入っており、それがびつくりするほど良かった。教室がシーンとなった。先生が朗読し

がなくても書ける。だからこそ、詩を作ったことのない人にも、国語が嫌いな人にも、自分自身を変えるチャンスのある世界だということを忘れないでいたいと思うのだ。

そんな風に、ヤンキーに刺激を受けながら、私は詩作の時間が一番好きになっていた。休み時間や家に帰ってから詩を作った。それらは、提出される授業の詩とは一味違っていた。家族にも友達にも相談できない思春期ならではの心の闇は、日記帳ではない新しいノートに連なり始めたのだ。間違いなく私はあの一冊の作詩ノートに支えられ、中学、高校時代を乗り切った。人前では明るいくせに、もともとと蓄積される心の錆は詩に形を変えることでしか取れなかった。本音を言える誰かがいたなら、私は詩を書き続けていなかっただろう。その必要がないからだ。その方が人間としては幸せなことだと思いが、残念ながら大学生になっても私の作詩ノートはどんどん溜まっていた。

ていった。そのとき書いたものの多くが、デビュー後に音源化され今もなお愛されている。

初期でこそこのように奔放に書けたが、詩と歌詞は別ものだった。歌になり演奏というドレスを纏った言葉は、もはや私だけのものではなかった。私ではない人の口から歌われステージを見上げるたくさんのお客さんに届けられることで、みんなのものになっていった。それはとても幸せなことだったけれど、同時に責任と覚悟があることでもあった。曲を聞い

高橋久美子
たかはし くみこ

1982年、愛媛県生まれ。鳴門教育大学卒業。ロックバンド「チャットモンチー」のドラマー・作詞家として活躍後、作家に。作家・作詞家としての活動のかたわら、詩の朗読、詩と絵の展覧会、詩作・朗読のワークショップなども積極的に行う。主な作詞曲に、ももいろクローバーZ「空のカーテン」、KANIKAPILA「トラブルメイカー」など。主な著書に、詩画集『太陽は宇宙を飛び出した』(FOIL)、写真詩集『家と砂漠』、エッセイ集『思いつつ、嘆きつつ、走りつつ、』(毎日新聞社)など。



た何万人のうちの一人でも自分の歌詞によって傷ついてはいけないという思いが、ファンが増えていく度に強くなった。また、聞いてくれた人の勇気や希望になってほしいと願いを込めてどんなネガティブな歌詞にも希望を添えて終わらせた。気づけば、私は歌詞とは別にまた詩を書くようになっていた。

言葉は、花束にもピストルにもなる。だからこそ、私達のように言葉を生業とする人間はその面白さと危うさを伝えなければならぬ。不良男子に光をあてた国語教師のように。何となくコンビニから流れる私の歌詞が、誰かの明日を作るのかもしれないという使命はいつも私の中にある。

人生は山あり谷あり。結局のところいくら勉強したってわからないことだらけだ。悲しいときには泣き、嬉しいときには笑い、世の中への疑問をふつと募らせ、どんな時代も心のアンテナを伸ばして生きることこそが、豊かな言葉と人生を作る秘訣なのだと思うている。

あの頃のノートを見返すと、感情のむき出し具合に恥ずかしくなる。けれども、今の自分には書けない宝物だとも思う。綴られた言葉は、ときに鋭いナイフになり、またエールになり私を明日へ向かわせた。決して上手くはないが、やはり日記ではない。そこには、心情の吐露だけでなく「表現」という美しさと面白さを求める探究心がみられた。ただの愚痴や嘆きではなく、作品として立たせることが自分の中のプライドであり、私を夢中にさせた詩の魅力だったのだと思う。

大学時代、軽音部の後輩に誘われてロックバンド・チャットモンチーにドラマーとして加入した。最初は私以外の二人の作詞・作曲した曲をアレンジして演奏していたが、ある日「久美子さんも詩が書けたりしますか？」とボーカルのえっちゃんに聞かれた。「うん、ちょっと書ける」と答えた。嬉しかった。私の詩にメロディーがつき演奏し歌ってくれるなんて。机の中にしまいこみだけの言葉を認めてくれる誰かがいることが嬉しくて嬉しくて、私は翌日までに約十の歌詞を作っ